

係のない知的な要因がいくつかあるのです。因子分析では直交因子といったりしますがね。同じように専門分野も無数にあると思うのです。だから誰でも大概なにかの専門家になれる。誰でも努力を重ねて、10年くらい経てば専門家になれる、そう言った人がいましたが、賛成しますね。若いときは、自分で自分のことが分からないことも多

いですから、壁に突き当たっても、諦めないで上手につきあってゆくのが大切だと思います。問題の周りをうろろろしているうちに、いつか解決策が見えてくることが多いと思います。

-----  
【取材後記】小笠原教授とのインタビューは、ここに再現したほかに、趣味、研究所と大学の違い、さらには、最近

の先生の研究テーマである「漸近理論」などにおよんだ。お話は、どちらかというと学問に関係することが多かった。先生は、小樽商大のアカデミズムを代表する1人であるから、おのずとそのような対談となったのであろう。大学の教員は、話してみると外観とはまったく違って、きわめて気さくなことがよくある。先生もそうであった。



## 学生評判記 / 第6回

### ファンシースナック 「森」

店主 / 森 信治・芳子さん

小樽市花園1-11-16 TEL.0134-32-5954

## 「留年した学生は、 頭を叩いてやります」

花園銀座通りから、「角磯ハブタイ屋本店」横の小路を入った奥に店はある。小樽生まれ、小樽育ちの森信治・芳子夫婦が経営する「森」は、今年で開店32年、今の店は5店目だ。商大生との関わりは、20年程前から始まった。芳子ママ：「3店目（スバル通り）が広がったのでアルバイトを雇うことになり、それから今まで、商大の男子学生に手伝ってもらってます。皆運動クラブの部員で、それから大抵の運動クラブはうちに入入りするようになりました。」

最近の花園は、商大生に以前ほど寛容ではなくなった。そんな中、心置きなく酒が飲める二次会の場として、運動部の「森」に対する人気は絶大だ。スペース的にも、ここは2階建てのフロアを持ち、150名程を収容することが可能である。ママ：「一番忙しい時は何といっても卒業式の夜。今年は全部で240名の予約が入ってます。上と下のフロアを2時間刻みで入れ替えていくんですよ。」ママさんには、客よりもバイトから、商大生気質の変化が見えてくるようだ。ママ：「以前のアルバイト学生は、働きながら酒も飲んでいましたよ。でも仕事はきっちりこなしましたね。人格にふくらみがあるというか、言われなくても気を利かす器用



さを持っていたと思います。今の子どもたちはアルバイト中に酒など飲みません。それはそれで真面目だけど、機転は昔の方があったかも。」信治マスター：「商大生といえば、一升瓶片手に酒盛りしているイメージがありましたね。」アルバイト学生の卒業時には、親も店へと挨拶に来る。これほどの信頼を勝ち得ている背景には、自らも大学生の子を持つママさんが、商大生に求める「学業第一」の姿勢があるのだろう。ママ：「クラブも大事だけど、勉強がもっと大事。試験期間中はバイトをしません。留年なんかとんでもない。4年で卒業することこそ親孝行なんです。」うむむ、中々手厳しい。だが今夜も、「森」では部員達が氣勢を上げる。ママ：「意外と上品に飲むのはアメフト部なんです。女子マネが大勢いるせいね。」筆者もテニス部員達と共によくこの店を訪れるが、必ず上のフロアで、下ではよくサッカー部が飲んでいて。ママ：「テニス部も飲み方はおとなしい方ね。どのクラブも少し広い上を希望するけど、サッカー部だけはいつも下にしてもらってます。サッカー部は元気がよくて、飲むと肩を組んで跳ねるんで上はダメなの。」なるほど、あれね。